

# 日本の若者は内向きなのか

信金中金月報掲載論文編集委員

永田 邦和

(長野県立大学 グローバルマネジメント学部教授)

今年の3月に、野球の日本代表(侍ジャパン)がWBC (World Baseball Classic)で優勝しました。筆者は準決勝と決勝をテレビで観戦していましたが、どちらも手に汗握る好ゲームでした。試合中はハラハラ、ドキドキし続けており、見終わった後は、心地よい疲れを感じました。筆者がプロ野球を見始めたのは1980年頃からですが、いつの時代も、魅力的なスター選手が多くいました。もし日本代表を作るなら、どの選手が選ばれるだろうか、メジャーリーガー代表に勝てるだろうかと思像していました。

当時の日米間の実力差は大きく、オフシーズンの日米野球では、メジャーリーガー代表に負けてばかりでした。オフシーズンの開催でしたので、どちらの選手もシーズン中のようなコンディションではありませんでしたし、お祭り気分でした。しかし、時々、メジャーリーガーを真剣にさせるような日本の選手も現れました。試合後、米国チームの監督が「あの選手をアメリカに連れて帰りたい」とコメントをしていました(ただし、実際に連れて帰られた選手はいませんでした)。その後、野茂英雄投手やイチロー選手、松井秀喜選手達がメジャーリーグで活躍するようになり、徐々に、日米の実力差も縮まってきました。さらに、大谷翔平選手のように、投手と打者の両方で素晴らしい成績を残す選手も現れました。日本人選手が海外で活躍すると、自分も挑戦しようとする選手が増えます。そのような選手達が努力し、切磋琢磨することで、選手自身だけでなく、日本の野球界全体が成長していきます。

3月のWBC決勝戦では、若手投手達がメジャーリーガー相手に自信満々に投げていました。かつて「日本人は大舞台に弱い」と言われていましたが、侍ジャパンに限らず、ワールドカップのサッカー日本代表や、オリンピックでの羽生結弦選手や平野歩夢選手も、大舞台であっても、普段通りか、普段以上の力を発揮しています。日本の若い世代の活躍を見ていると、日本の若者がとても頼もしく感じます。メディアやSNSでは、「若い世代は元気がない」という事例や、そのために日本の将来を悲観する意見をよく目にしますが、筆者は、若い世代の活躍を見ると、日本の将来は明るいと感じています。

このような筆者の意見に対して、世界で活躍しているのはスポーツ等の一部の分野であり、

多くの分野では、日本の若い世代は内向きであるという指摘もあると思います。かつて、日本の大学生の海外留学が頭打ちになったことから、若者の内向き化が指摘されてきました。しかし、独立行政法人日本学生支援機構の『日本人学生留学状況調査結果』では、2010年代以降、コロナ禍前まで、日本人学生の留学者数が増加していることが示されています。実際に、筆者も、常日頃学生と接していると、海外での勉強や仕事に関心を持っている学生が少なくないと感じています。筆者の勤務先の長野県立大学では、全員が在学中に3週間程度の留学をすることが必須になっていますので、海外での活動に関心のある学生が集まりやすいということもあります。しかし、過去に勤務していた地方国立大学では、金銭的理由で海外留学を希望しない学生は多かったですが、その代わりに、外国人留学生と積極的に交流しようとしていました。以前に比べると、日本の若者の内向き化は解消されているようです。

2019年に、本学では第1回目の留学を実施しました。学生は、現地の大学で英語の授業を受け、公共施設や民間企業を見学しました。英語の授業の講師は外国人ですので、授業中の指示や注意も英語です。その日の宿題の範囲や内容を聴き取るだけでも苦勞します。日本人は内気な人が多いので、英語を話そうとすると、声が小さくなります。そうすると、講師から“Speak Loudly”と注意されます。英語が得意な学生にとっても楽な授業ではありません。3週間という短い期間ですが、非常に有意義な経験ですので、学生も大きく成長します。

コロナ禍もあり、過去2年間はオンラインで実施し、今年は、現地で受講するグループと、オンラインで受講するグループに分かれました。現地に行くのと比べて、オンライン留学では、成果が少ないのではないかと心配の声もありました。しかし、1日2時間マンツーマンで外国人講師と会話をするという内容でしたので、学生の英語力（特に、スピーキング能力）が大きく向上しました。筆者のゼミナールの学生がオンライン留学を受講しましたが、留学後に初めて会ったときに、学生が一回り大きくなったように感じました。短期留学を経験すると、海外で活動したいという思いが強くなるので、協定先の海外の大学に留学したり、休学して長期の留学やワーキングホリデーに参加したりする学生もいます。

このように、日本の若い世代は世界に目を向けて、世界中の国々とも十分に渡り合えていくと思います。本誌の2023年6月号の「中小企業のSDGs経営を支える「中小企業・SDGsビジネス支援事業」①—国際協力機構(JICA)による中小企業の海外ビジネスサポーター—」で紹介されていたように、厳しい環境にある日本の中小企業ですが、海外(特に、途上国)に目を向けると、その高い技術力を活かせる場が数多くあります。海外に目を向けている若者達が日本の中小企業を引っ張っていき、新しい日本を作っていくかもしれません。